

## ワンポイント・ブックレビュー

好井裕明『「あたりまえ」を疑う社会学-質的調査のセンス』光文社新書（2006年）

「なぜこんな本を書きたいと思ったのだろうか」と著者は巻頭で述べている。「社会学では社会調査士という資格制度が進められている。」「その資格を取得するためのカリキュラムに不満なところがある。計量的な分析に関する科目は充実しているのだが、質的な調査に関する科目がまだまだという印象を受けるからだ」「単なる調査技法でもない方法論でもない」、「人が生きていくことへ向かう『まなざし』」、「自分なりの『まなざし』を創造できる」、「世の中を質的に調べるセンスについて書きたい」。

そして、量的な調査、すなわち、アンケート調査での数字による分析に疑問を呈する第1章が始まる。すぐれた量的調査の有用性は十分認めつつ、答える人に対する想像力に欠けた設問、あたりまえのことしか示さないクロス集計、回答をむりやり落とし込もうとする一次元尺度などの問題性を指摘し、「どうしたら人々が生きてきた現実と出会うことができ、彼らの『場所から』解釈することができるのか」と問いかける。

第2章から第5章では、暴走族集団にカメラを持って入り込み信頼を得た、大衆演劇の役者として弟子入りしその一員になりきろうとした、など、数々のすぐれたフィールドワークや著者の体験を、かなりの紙幅で実にいきいきと紹介している。

そして、第6章と第7章では、こうした質的調査にとり組む基本的態度が提示される。それは「『あたりまえ』を疑う」、すなわち、人々が「ふだんやっているけれど気付かない営み」に含まれる秩序や規範を、恣意的な決めつけでなく、読み解いていく態度である。また、「『普通であること』に居直らない」、すなわち、調査者自身がとらわれている「普通」という概念を疑い、相対化する調査態度である。社会的マイノリティーに強く関心を寄せる著者の姿勢が色濃く反映されているために、執拗な印象を受ける記述もあるが、調査態度としておおむね肯定できるのではないだろうか。

労調協の私たちが主にとり組む量的なアンケート調査は、明確な枠組みを持たずに実施すれば、何も得られず回答者の時間を無駄に使うだけのものになる。したがって、仮説をたて、質問は調査者の意図が明確に伝わるように設計されなければならない。それに対して、本書は、その枠組みを絶対視せず、疑い、たえず再構築することを求めている。著者もテキストとして活用されることを期待しているようだが、社会調査にたずさわるのが自戒のために折にふれて読み返しておきたい1冊だと感じた(T.S.)